昭和文学全集

26

吉村昭

立原正秋

宮尾登美子

山口瞳

新田次郎

五木寛之

野坂昭如

井上ひさし

小学館

昭和文学全集

26

吉村昭

立原正秋

宮尾登美子

山口瞳

新田次郎

五木寛之

野坂昭如

井上ひさし

小学館

昭和文学全集
第26巻

昭和六三年十月一日　初版第一刷発行

著者——吉村昭　立原正秋　宮尾登美子　山口瞳
新田次郎　五木寛之　野坂昭如　井上ひさし

発行者——相賀徹夫
発行所——小学館
〒一〇一—〇〇一 東京都千代田区一ツ橋二丁目三番一号
振替 東京八—二〇〇番
電話 編集・〇三—二三〇—五二二六
業務・〇三—二三〇—五三三三
販売・〇三—二三〇—五七三九

印刷——凸版印刷株式会社
製本——凸版印刷株式会社
若林製本工場
用紙——三菱製紙株式会社
著者検印は省略いたしました

定価＝4,000円

Printed in Japan ISBN4 09 568026 1
©AKIRA YOSHIMURA MITSUYO TACHIHARA
TOMIKO MIYAO HITOMI YAMAGUCHI TEI FUJIWARA
HIROYUKI ITSUKI AKIYUKI NOSAKA HISASHI INOUE 1988

＊造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。＊本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

目次

吉村昭　5
7　少女架刑
30　星への旅
51　遠い日の戦争
146　月下美人

立原正秋　171
173　「八月の午後」と四つの短篇
183　剣ヶ崎
217　冬のかたみに
314　日本の庭　より　序　美の再発見

宮尾登美子　321
323　岩伍覚え書

山口瞳　433
435　江分利満氏の優雅な生活　より
471　居酒屋兆治

新田次郎　547
549　八甲田山死の彷徨

五木寛之 655

657 さらば モスクワ愚連隊

680 蒼ざめた馬を見よ

713 ソフィアの秋

730 こがね虫たちの夜

747 さかしまに

784 風に吹かれて より

野坂昭如 791

793 エロ事師たち

882 骨餓身峠死人葛

900 マッチ売りの少女

井上ひさし 909

911 手鎖心中

939 あくる朝の蟬

新釈 遠野物語 より

950 笛吹峠の話売り

957 鰻と赤飯

戯作者銘々伝 より

965 式亭三馬

973 唐来参和

981 山東京伝

不忠臣蔵 より

989 安井彦右衛門

998 酒寄作右衛門

1006 松本新五左衛門

1015 化粧

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

1033　作家アルバム

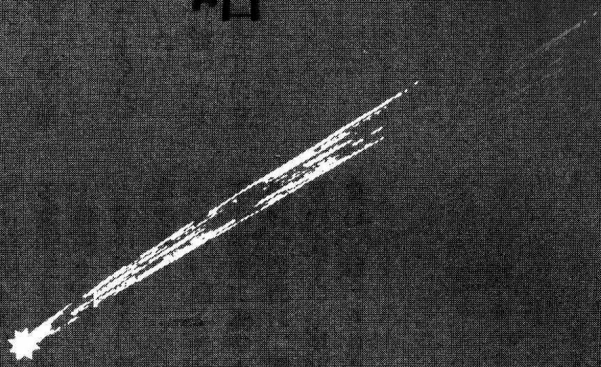
解説

1041　吉村昭……福田宏年
1045　立原正秋……高井有一
1049　宮尾登美子……松本徹
1053　山口瞳……常盤新平
1058　新田次郎……尾崎秀樹
1062　五木寛之……今村忠純
1067　野坂昭如……長部日出雄
1071　井上ひさし……扇田昭彦

年譜

1075　吉村昭……吉村昭
1079　立原正秋……武田勝彦
1083　宮尾登美子……編集部
1087　山口瞳……編集部
1091　新田次郎……瑞木尚
1095　五木寛之……文芸企画
1099　野坂昭如……村上玄一
1103　井上ひさし……渡辺昭夫
1108　底本について
1110　用字用語について

吉村昭



少女架刑

一

呼吸がとまった瞬間から、急にあたりに立ちこめていた濃密な霧が一時に晴れ渡ったような清々しい空気に私は包まれていた。

澄みきった清冽で全身を洗われたような、爽やかな気分であった。

私は、自分の感覚が、不思議なほど鋭く研ぎ澄まされているのに気づいていた。

家の軒から裏の家の軒にかけて、雨滴をはらんだ蜘蛛の巣が、窓ガラス越しに明るくハンモックのように垂れているのが眩ゆく目に映じている。

蜘蛛の巣は、裏の家の小暗い庇の下に固着している。その庇の下に、雨を避けた小さな蜘蛛が、ひそかに身を憩うているのを私の視覚は、はっきりととらえることができた。新芽のように小気味良くふくらんだ華麗なその蜘蛛の腹部に、繊細な毛が無数に生え、その毛の尖端に細やかな水滴が霧を吹きつけられたように白く光っているのさえ見てとることができた。

私の聴覚も、冴え冴えと澄んでいた。

軒端から落ちる雨滴の音――それが落下する箇所でそれぞれ異った音色を立てていることも鮮明に聴き分けることができた。

弾けるような乾いた単調な音は、勝手口の石の台の上に落ちる雨雫の音。明るいなんとなく賑やかな音は、窓ガラスの下の砂礫の浮き出た土の上に落ちる水滴の音。水滴が土を掘り起し、その小さな水溜りの中で細やかな砂礫が、雫の落ちる都度互いに身をすり合わせ洗い合っている気配すら、私の耳には、はっきりとききとれた。

突然、私の感覚が、かき乱された。

家の前の露地から、軽快なしかし鋭く突きささるようなクラクションの音が、澄明な楽の音にも似た雨滴の音を消してしまった。

迎えの自動車が来たのだ。

私は、耳を澄ました。

自動車の鈍い開閉音がきこえ、そして水溜りをとびながら私の家に近づいてくる靴の音がした。私は、入口のガラス戸を凝視した。と、曇りガラスに白いものが薄く映った。そして、ガラス戸のふちに肉色の指頭が色濃く密着すると、ガラス戸が軋みながら引き開けられた。

「水瀬さんは、こちらですね。病院から参りました」

短い薄汚れた白衣を着た痩身の男が、顔をのぞかせた。

父も母も、一瞬放心した眼を入口の方へ向けたが、急に気づくと立ち上り、あわただしく部屋の中を取り片付けはじめた。六畳一間きりの空間を私の仰臥した体が占めているので、母が内職に彩色している白けたお面の山は、乱雑に部屋の隅にうず高く積み上げられた。

母が区役所に行って手続きをして帰って来たのは、わずか十分ほど前。既に迎えが来よ

うとは、母も父も予測すらできなかったのだろう。

「むさくるしい所でございますけど……」

母は、淀みのない慇懃な口調で、着物の衿を病的なほど指先でいじりながら男を促した。

男は、遠慮する風もなく、すぐに靴を土間に脱いで、茶色くなった畳の上に上って来た。頬の赤い骨ばった顔の男だった。

「いつお亡くなりです」

男は、私のふとんの近くに坐ると、それが習性らしくすぐに口をきいた。

「九時一寸過ぎでございました」

母は、大きな眼を媚びるように見張った。

男は、髪も乱れ衣服も垢じみている母が、思いがけず丁重な口をきくことに少し戸惑っているようだった。

「まだ、お若いようですね」

男は、面映ゆ気な表情で、手拭をかぶせられた私の方を見つめた。

「はい、十六でございました」

「それはお気の毒でしたね」

男は、わざとらしく眉を曇らせてみた。

男の着ている白衣は、何度も洗い晒されたものらしく織り目も浮いてみえ、ボタンも半分かけて糸が今にもとれそうに垂れ下っている。

「では、早速で恐れ入りますが、埋火葬許可証を見せていただきたいんですが……」

母は、一瞬その意味が判らぬらしく、「はい？」と、目を見張ってみせた。

「区役所でたしかくれたと思いますが、書類を……」

母は、漸く納得がいったらしく頻りとうなずきながら、身を少しよじるようにして着物の衿元から幾つにも畳んだ書面を取り出し男の前につつましくさし出した。

父は、眼を赤く濁らせながら、部屋の隅に身を竦ませて坐っている。

「それから、これに捺印していただきたいんですが……。もしなければ拇印でも結構です」

男は露骨に急いでいる風を見せて、解剖承諾書と書かれた紙を畳の上にひろげた。

「はい、はい」

母は、愛想よく返事をすると、すぐに立って押入れの下段に嵌め込まれた茶箪笥の前に膝をつくと、曳き出しから紐のついた古びた小さな印鑑をとり出して来た。朱肉がないので、母は、何度もその印鑑に息をはきかけた。

「御参考までに申し上げて置きますが、病院では丁重にお嬢さんのお体を調べさせていただきましてから、火葬し、きちんと骨壺に納めてお宅の方へお返しいたします。勿論その間の費用は、すべて病院持ちです」

男の声は、何度もいい慣れているらしく殊更荘重さをこめた淀みのないものだった。

母は、神妙な表情で伏目になって何度も相槌を打っていた。

「それから……」

男は、白衣のえりから手をさし入れ、内ポケットから、白い紙に包んだものをとり出した。

墨で、香奠料と記されている。

「これは、病院からのものです」

男は、あらたまった表情で母の方へ押しやった。

「さようで御座いますか、御丁寧に、……では、遠慮なく頂戴させていただきます」

母は、一寸面映ゆ気な表情を顔に浮かべながら、指を揃えて深々と頭を下げた。

身を縮ませていた父も、母にならって頭を下げた。

「それでですね」

男の声が、一層事務的になった。母は如才ない表情で少し頭を傾けながら男の顔をうかがった。

「これは病院の規則で最低一カ月はお嬢さんのお体をお預りすることになっているのですが……、お骨は、いつ頃お返しいたすことに

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

しましょうか」
男は、母の顔を探るような目つきで見つめた。
「さようでございますね」
母は、少し身を退くようにしてなんとなく照れたように愛想笑いをしながらも、返答のしようがないらしくわずかに困惑の色を顔に浮かべた。
「どうでしょう、二月ぐらいでは……」
男は、母の思案を封ずるような口調で言った。
母は、どう返事をしてよいのかわからぬらしく、一寸顔をこわばらせて父のいる部屋の隅の方をなんとなく振り向いた。
父は、母と視線が合ったが、ただ眼を臆病そうに瞬いているだけであった。
母が父に、微かながらも縋りつくようなこんな視線を向けたのを見たことは、私にとって初めてのことだった。父も、母の視線に戸惑いを覚えているようだった。
「よろしいですか、それで」
男のせかせかした声に、慌てて男に顔を向けると反射的に、はい、と母は、うなずいていた。
そうですか、それでは二月後――男は、書面に万年筆で書き込むと、
「では、運ばせていただきます」
と、立ち上り、すぐにガラス戸を開けて外へ出て行った。
男が出て行くと、母は急にいつもの疲れたような険しい表情にもどり、すぐに香奠料と書かれた包みを手にすると、私の枕もとに置かれた蜜柑箱の上に置いた。中身の金額を推しはかる不安な表情が、母の疲れた顔に汚しみのようにひろがった。
父も、その紙包みの方をじっと見つめている。
「いいかい」
ガラス戸の所で妙に明るい男の声がして、後向きになった白衣の男が節だらけの寝棺を持って入って来た。もう一方の隅は、髪の濃い若々しい白衣の男が持っている。
部屋が狭いので、棺は処置に困るほどひどく大きく見えた。棺は、私の寝床と平行に部屋一杯にひろがって下された。
棺の木蓋がとられ、私の薄い掛ぶとんがはがれた。
私は、マニキュアをした指を母に組まされたままの姿勢で、シュミーズ一枚で仰向けに横たわっていた。
痩せた頬の赤い男の骨ばった手が、私の腋にさし込まれ、若い男の肉付きのよい手が、私の両腿をかかえた。私の体が冷えているためか、二人の男の手が、私の体にはひどく温いものに感じられた。
私の体は、二人の手で持ち上げられ棺の中にそのまま納められた。鉋をかけていない粗い板なので、私のシュミーズからむき出しになった肩のあたりにかなり大きな木の節目が当っていた。しかし新しい板らしく、棺の中はむせるような木の香で満ちていた。
蓋がはめられ、棺は二人の手で前後して持ち上げられた。
「お父さん、手をお貸しして」
母の声に、父が部屋の隅から慌てて立ち上ると、私の棺の脇を不器用に持った。
父が片側を忠実に持ち上げているので、棺はひどく不安定に揺れながら部屋を出た。
棺が軒を離れると、いきなり棺の蓋に雨が音を立てて白い飛沫をあげた。棺の中は、雨音で満ちた。
家の前に停車している自動車は、黒塗りの大型車で、雨にボディが洗われ、雑然と軒をさし交している家並が、緻密に映って美しく光っていた。
後部の扉が左右に開けられ、私の棺は、男の手でその中に押し込まれた。
不思議なことに、私の眼は、四囲が棺にさえぎられ更にその上自動車の車体にさえぎられているのに、雨に濡れたその細い露地の光景が、妙に明澄に、丁度水を入れかえたばか

りのガラス張りの魚槽の中を透し見るように水々しくすきとおって見えるのだ。

露地の両側に並んだ家からは、好奇心や羨望やそして蔑視とが奇妙に入り混った人々の顔が無遠慮にのぞいている。これほどの高級車が、この露地に入り込み駐車したことは未だ嘗てなかったことなのだ。

後の扉から、白衣を着た男が二人、身をかがませて勢いよく私の棺の脇にとび込んで来た。

「おい、いいよ、出してくれ」

運転台に声をかけた。

「ひどいね、この雨は……」

男たちは、ハンカチを出すと、頭を拭き、腕を拭った。

自動車が、静かに動き出した。

家の戸口で見送っている面長な母の顔、臆病そうに半分だけガラス戸から顔をのぞかせている父。その二人の姿が雨の中を次第に後ずさりはじめた。

さよなら、私は、小さくつぶやいた。

露地は狭く、自動車は、緩い動きでわずかずつ進んだ。

女や子供たちが軒の下に立って、近々と過ぎる自動車のガラス窓を伸び上るようにしてのぞいたり、濡れ光った車体に指をふれさせ筋をつけたりしていた。

「全くひどい貧民窟だな」

運転手は、慎重にハンドルを操りながらつぶやくように言った。クリーナーが、せわしく動いている。ガラス窓は、雨滴で一杯だ。

漸く露地を抜け出ると、自動車は、わずかに速度を増した。が、道が狭いために自動車は、時々徐行することを余儀なくされた。

道に、板張りの箱車が置いてあった。自動車は、停車してホーンを鳴らした。

低いバラック建ての家から、つぎだらけの雨合羽を着た老人が大儀そうに出て来て、箱車を引いて道を開けた。

ふと、私は、道の片側に番傘を傾けて身をすりつけているようにしている色白の若い男に気がついた。その顔には見覚えがあった。それは藤原富夫という、中学での同級生であった。

富夫は、紺の作業衣を着ていた。そして胸には、セロファンで包んだ花束を大切そうに抱いていた。

道の両側につづいた薄汚れた家並の中で、セロファン紙に透けたその花の色が、対照的にひどく清らかで美しくみえた。

自動車が、ゆっくりと動きはじめた。

富夫は、家並の板壁に一層身をすり寄せた。

番傘の骨が、自動車の片側を鳴らして通り過ぎた。

私は、自動車の後方を眺めた。富夫が番傘を肩にかつぐようにさして、雨に濡れた道を遠くなって行くのが見えた。

さよなら、私はまた小さくつぶやいた。

花の色が、目にまだ残っていた。富夫と花束――それはなんとなく不似合いな取り合わせのように思えた。中学生の頃の富夫は、他の生徒と同じように貧しい衣服を身につけていたが、いつもきれいに洗われた清潔なものを着ていた。顔立ちも華奢で、髪を刈ると、その坊主頭が、淡く緑色に染って、爽やかな感じであった。

私は、雨の中を茸のような傘がすっかり見えなくなるまで見つめていた。

自動車は、身をくねらせるようにして走りつづけている。

「この死体は、何時頃死んだものなの」

若い男の声がした。

「九時一寸過ぎだってさ」

「じゃ、まだ二時間ぐらいだね」

「そうなんだ。全く得難い獲物だよ。研究室の連中、喜ぶぜ」

痩せた男は、煙草の脂のついた歯を露わにして微笑した。

「村上さん」

男は、ポケットから煙草を取り出しながら

運転台に声をかけた。
「これ、新鮮標本をとるだろうからね、急いでやってくれよ」
「あいよ」
運転手は、背を向けたまま気さくに言った。
自動車は、町中を抜け、土手に上ると、せわしく車の往き交う長い木の橋を渡った。
若い男は、すっかり曇ったガラス面に指で二筋三筋曇りを拭って、白く煙った広い川筋を見下していた。
繁華な町並を、自動車は進んだ。
雨勢が漸く衰え、雨脚も急に細まってきた。
街の一角に、明るく日が射した。雨の音が、急に消えて、それと入れ代りに自動車の警笛や街の物音が活き活きと湧き上ってきた。
自動車は、大通りから石塀のつづいた住宅街の坂を上りはじめた。
塀から坂の上に覆いかぶさるようにせり出した樹の繁りに日が当って、自動車のガラス窓は、緑一色に染った。風があるのか、時折葉のふり落す大粒の水滴が、自動車の屋根に音を立てて落ちてきた。
若い男が、窓を開けた。
「あがったね」
若い男は、窓から外をまぶしそうに目を細めて眺めた。その瞳に、葉の繁りが凝集して映っていた。
「願ってもないことだ。こう雨気がこもっちゃ、死体の変化が早まるからね」
痩せた男は、煙草を口にくわえたままもう一方のガラス窓を開け、そして私の棺の蓋を取り除いた。
急に、冷え冷えした空気が棺の中に入ってきた。
私のシュミーズだけの体が、男の視線にさらされた。
「若い娘だね」
「そうだ、まだ十六だってさ」
男は機嫌が良いらしく、魚籠の中の魚を見定めるように私の顔をのぞいた。
「顔は稚いけど、十六にしてはいい体をしているな」
痩せた男は、私の体を無遠慮に眺めた。
若い男は、返事をしなかった。
痩せた男は、私の体から眼を離さず煙草を短くなるまですいつづけた。
その視線に、私は、身の竦むような羞恥を覚えた。そしてまた、自分の曝された軀を一方的に眺め廻されていることに侮蔑をも感じた。
母がさげすまれている、と、私は、咄嗟に思った。
「美恵子は、若い頃の母ちゃんに似てきた」
父が、何気なくそんなことを言ったことがあった。
母は、一瞬ぎくりとしたらしく、不快そうに眉を顰めて私の体を一瞥しただけであった。母は、育ちのいやしい父と結ばれ父の子を生んだことに強い自己嫌悪を感じているのだ。
母は、地方の神官の末娘として育ったが、嫁いだ資産家の夫が精神薄弱者で、そんなことから実家に逃げ帰った。経済的な支援を婚家先から受けていた実家では、その都度母を婚家先に戻したという。一年ほどして、母は遂に堪え切れずに家を飛び出し、ある鳥料理屋に住込女中として住み込んだ。
板前をしていた父とは、そこで知り合ったのだ。
私は、自分が母に似ていることは知っていた。私の肌は白く、顔立ちも面長で、鏡をのぞくと母との濃厚な類似がそこにあった。
が、私は、母に似ていることに実はひどく当惑をおぼえていたのだ。些かでも似ているなどということが、僭越な分に過ぎたことのように私には思えてならなかったのだ。
母の生れのよさを、父は始終私にいいきかせた。事実、私の眼にも、母は、私や父とは

全く異った世界で生れ育った人間のように映じていた。容貌にも言葉遣いにも、そして立居振舞にも品位が感じられ、手をついて挨拶するときなど母の指は繊細に撓って幼い頃からの厳しい躾けを連想させるものがあった。

父には、ひどい賭博癖があってそのため勤めもしくじり、二、三年前からは朝ゲートルを几帳面に足に巻いては、日雇い労働者として家を出て行く。金が少しでも入ると、父は賭け事にその金を悉く費消してしまう。家はそのためひどく貧しく、母は、険しい表情で面を彩色しつづけている。

父が無一文になって帰って来ると、母は憎々し気な顔で、物差しで父の体を容赦なく打った。黙ったまま物差しを振りつづける母の姿には、やはりある風格があった。

父は、畳に額を伏し、じっと身を竦めて母の打擲に堪えていた。

「素人じゃなさそうだね」

若い男が、男の肩越しにのぞき込みながらつぶやくように言った。

私の髪は薄い小麦色に染められ、指にも足指にも朱色のマニキュアが施されていた。

「親のために働かせられるだけ働かされて、死んでしまうと体を売られる。親の食い物にされたんだな」

男は、私の体を眺めつづけている口実のように少ししめった口調で言った。

私は、急に不快な気分になった。自分の親を、男に悪しざまにいわれていることが腹立たしくてならなかった。

親のために働いてきた……ということは事実にちがいはなかった。が、働いて親に貢ぎたいと希ったのは、私自身の意志から発した行為だったのだ。

私は、中学を出てから働きに出た。給与のよい職場を転々として移り歩いた。勿論経済的な理由からであったが、私は、母が貧しい生活の中に身を浸していることを不穏当な罪悪のようにすら感じていたのだ。

一月ほど前、私がウエイトレスをやめてヌードチームに入ったのも、母に対する私の奴婢的な感情がそうさせたので、幾らかでも多くの金を母に捧げたい自発的な行為であったのだ。

そのヌードチームは、ローラースケートを使うということで特色があった。

不器用で自転車にも乗れなかった私は、練習中、気の遠くなるほど顚倒しつづけた。そして両腿が痼って痛く、夜も眠れぬほどであった。

練習をはじめてからわずか四日目で、私は半強制的にチームの一員として初めて出演させられた。

……音楽がはじまると、ローラースケートをつけた私たちは、一人ずつ色光の漂うフロアーに滑り出て行った。私の傍らには、チーム四人の中のただ一人の男、胃弱で固型物を決してたべたことのない初老の団長が、くまどったような厚いドーラン化粧をした顔に始終にこやかな笑みを浮かべながら、それでも慎重に、私が転倒しないように手をもち腰に手を廻してくれた。照明が変ってスウィートな曲が流れると、新顔の私から、腰にまきつけた紗をはずし、ブラジャーを脱いで行く。転ばぬことだけに神経が使われて、私は、初めてのときでも恥しさということは忘れていた。

ローラースケートは、フロアー一杯に客席すれすれに滑って行く。ぶつかりそうになり客席から女の嬌声が上った瞬間、スケートは、弧を描いて反転しフロアーに戻る。スケートの車は、曲のリズムに乗って、波のような音をしきりとたてながらフロアーの上を往き交う。曲が終りに近づく。私たちは、思い思いに最後のポーズをし、そして客席ににこやかに挨拶をすると、一人一人、カーテンのかげに滑り込む。

楽屋に入ると私たちは、競うようにスケートをボストンバッグの中にしまい、衣裳を抱え、体に簡単なものを羽織ってキャバレーの

従業員出口から走り出る。そして、タクシーを拾うと次のキャバレーに駈けつける。

私の貰い分は、一回のショーごとに平均三百円の割で、一夜に、千円は越える収入になった。

「あの団長は、女に全然関心がないのよ、体に欠陥があるらしいね」

古顔の三十を過ぎた女が、不服そうな表情で言ったことがある。女の話では、団長は年に二、三回必ず男のことで事件を起すという。その相手は、バンドマンであったり、ボーイであったり、行きずりの若い男であったりするという。薄い髪をきれいに撫でつけている団長が、その時は頬もこけて面変りするほど焦ら立った表情になるという。

団長は、いつも女のような声をさせて、チームの女たちには不自然なほど優しい。ただ、突然休んだり、集合時間に一分でも遅れると自分の感情を抑え切れぬのか、額に血管を生々しく浮き上らせて痙攣した手で容赦なく女たちの頬を叩いた。そして、その上懲罰として出演料からも幾許かの金を差引いた。

いたたまれずに退団する女もいたが、団長は、すぐに代りの女を連れてきて、素人の娘を三日もあれば出演させられるような、特殊な技術指導の才を持っていた。

一昨夜、私は、家を出るときすでに体が熱を帯びているのに気づいていた。が、欠勤すればかなりの金額を罰として引かれてしまうことを知っていたので、約束の場所へだるい足を曳きずりながら出掛けて行った。

キャバレーから、キャバレーへの目まぐるしい駈け持ち。そして遂に最後のキャバレーで、急に意識が薄らぎ、演奏しているバンドのステージに勢いよく腰を打ちつけ顚倒してしまったのだ。団長に頬を強く打たれたのも朧気ながらであった。

家へ戻されても、私の熱は下る気配もなく、額に当てた濡れ手拭もすぐ湯気を上げて乾いてしまった。胸をしめつけられるような息苦しさで、私は、ただ目を据え喘いでいた。

医師がきて診察を受けたとき、すでに私の体は手遅れになっていた。

死因は、急性肺炎であった。

「簡単に助かったものを、なぜこんなになるまで放って置いたのです」

眼鏡をかけた若い医師は、腹立たしそうにきつい語調で言った。

母は、拗ねたように横を向いていた。そして、医師には、茶も出さなかった。

家には、私の持ってきた稼ぎの金が少なからずあったはずであった。が、私は、医師を最後まで呼ばなかった母を恨む気持には全くなれなかった。

「美恵子が死んでしまう」

父が、おびえたようにふるえ声で言った時も、母は、

「風邪ですよ」

と、不快そうに眉をしかめるだけで素知らぬ振りをして取り合おうとはしなかった。

手遅れにしろ、母が私のために医師を呼んでくれたというだけで私は、恨むどころか涙の出るほど感謝せねばならなかった。私が物心ついてから、ともかくも医師が私の家にきたことは、その時が初めてのことであったから……。

それにしても、団長が、出演中私が不仕末をしたことで損害金を請求しに家にやってきた時、私が熱に喘いでいる枕許で母が団長に浴びせた怒声は激しかった。

想像も及ばぬ野卑な言葉が、母の口から絶える間もなく迸り出た。

私は、この母の罵詈を金銭ゆえにとは思いたくなかった。

「娘をいいように食い物にしやがって」

この母の言葉に、私は、朦朧とした意識の中で涙ぐんだ。

母の愛情が、その言葉の中に十二分にこもっているように私には思えた。

団長は、体をひどく痙攣させて戸も閉めず

に帰って行った。

……自動車が、ゴーストップの近くで停止した。

それきり、自動車は停ったままになった。自動車の前方には、広い舗装路に、雨の名残りを残した自動車が、兜虫のように濡れた車体を光らせて間隙なく詰っている。警笛も、しきりと湧き起っている。

「どうしたんだい」

痩せた男が、いぶかしそうにフロントガラスを透し見た。

運転手も、窓から身を乗り出して伸びをするようにして前方を見渡している。

「事故でもあったのかな」

運転手は、ひとりごとのようにつぶやいた。

自動車は、全く動き出しそうな気配も見せない。都電も数台止り、後部の窓から制帽をかぶった車掌が身を乗り出している。

「弱ったね、動き出しそうもないな」

痩せた男は、焦ら焦らした声を出した。

「標本がとれなくなったらなにもならなくなるからな。どうだい、バックして迂回したら」

男の声に、運転手は、ハンドルを握り首を曲げて後部のガラス窓をうかがった。

「駄目だ、もう出られない」

たしかに自動車の後尾には、すでに十台近い車がぎっしり詰り、さらに続々とその台数を増している。

痩せた男の顔に、漸く焦りの色が浮かびはじめた。

「なにをしていやがるんだろうな」

痩せた男は、腹立たしそうに舌打ちした。

窓から一心に外を見ていた若い男が、ふと、悠長な声で言った。

「なにか通るようですよ」

運転手も、窓から首を出した。

日の当っている反対側の歩道に、女や子供たちや通行人が歩道から溢れるように並んで、一様に前方の大通りの方向に顔を向けている。

と、その時、甲高い女のマイクを通した声が、レコードらしい埃っぽい音楽の音に混ってきこえてきた。そして、それにつれ、歩道の人並が急に動揺しはじめ、交通整理の緑色の腕章をつけた警官が車道にはみ出した人々に注意を与えはじめた。

「なんだろう」

痩せた男も、急に興をひかれたらしく、ガラス窓に顔を押しつけた。

音楽とマイクの声が近づき、あたりに賑やかな空気が溢れた。いつの間にか、警笛の音は、消えていた。

「あ、ミス××のパレードだよ」

若い男が、突然弾んだ声を上げた。

車内の空気が、急に明るくなった。痩せた男の顔からは、焦ら立った表情は消えて、頬にしまりのない笑いが浮かんだ。

初めに、音楽とアナウンスを撒き散らしながら、軽金属の大袈裟な装飾を施した大きな宣伝カーがゆっくりと通った。そして、そのすぐ後に造花とモールで埋った華美なオープンカーが続き、その上に赤いマントを羽織り王冠をつけた若い女が立っていた。

女は、巧妙な美容師の手によって装われたらしく、化粧も髪形もなんの乱れもなく細面の顔にひどく似合ってみえた。女は、疲れた顔に無理な微笑を浮かべながら、しきりと歩道の人、停止している車の中の人々に手を振っている。

私は、キャバレーで華やかな衣裳を身にまとい、にこやかに微笑しながらスケートを走らせていた自分の姿をそこに見たような気がした。

女は、微笑することにも手を振ることにも疲労し切っているように見えた。女の微笑は、固定した一定の表情しかなく、すぐ泣き顔にでも変るような歪みが口許に現われていた。

私の目には、ドーラン化粧をした女の顔

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com